

体積感を維持しながら繁殖性を高め、九州勢にない独自の遺伝子をつないでいけば、北海道はさらに活性化する。まだ優秀な遺伝子は眠っている。それをどう発掘できるかどうか」と指摘する。

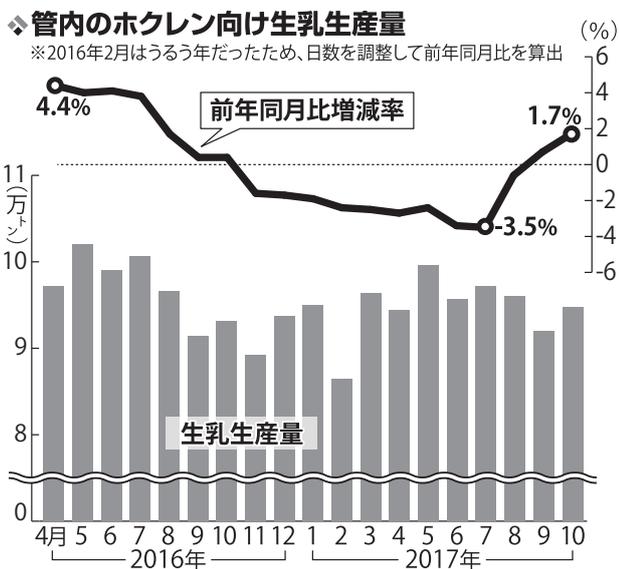
管内では、十勝和牛推進協議会（鈴木英博会長）が昨年、育種を進める部会を立ち上げた。生産者が自治体やJAの枠を超えて交流しながら、和牛の改良や飼育管理の質を高めた結果、「花の7区」をはじめ過去最多の出品頭数につながった。

鈴木会長は「十勝には府県に比べて若い生産者が多い」と将来性に期待。十勝農協連の西部博寿畜産部長は「全共を目指す最大の目的は地域の飼育管理技術の底上げ」と、生産者の切磋琢磨（せっさたくま）が産地形成につながると強調する。和牛の数だけでなく質の評価がさらに高まれば、十勝は酪農に肉牛を加えた真の「畜産王国」になる。

生乳生産下げ止まり 2016年産飼料の悪影響脱す

2017年11月15日

低調だった管内の生乳生産量が下げ止まりつつある。ホクレンが集計した管内生産量によると、今年9月に11カ月ぶりに前年同月を上回り、10月も1.7%増の9万5000トン弱（速報値）だった。昨年の天候不順で牧草や飼料用トウモロコシの作柄が悪化した影響が一巡。今年刈り取った牧草は品質が良く、生乳の質と量に好影響を与えそうで、酪農関係者の間で本格回復を期待する声が多い。



ホクレン向け生乳生産量をみると、昨年は4～7月の増加率が前年同月比4%前後だったが、その後伸び悩み、11月から今年8月まで前年割れが続いた。

今年10月の増加率は9月（0.7%増）より拡大。ホクレン以外に生乳を供給する酪農家の生産量を含めても、同様の傾向とみられる。

昨年は、栄養価が高いとされる「1番牧草」の刈り取り時期に当たる6月の降水量が多く、さらに台風が直撃した。このため全体的に収穫時期が遅れ、品質悪化を招いた。

飼料用トウモロコシも出来が悪かった。これらの自給飼料で乳牛の餌を十分に確保できず、乳量の低下につながった。

これに対し、今年の牧草は春先からの好天などで順調に生育。1番牧草の収穫は平年より早かった。品質も上々で、「餌が今年産の牧草に切り替わり始めたことで乳量も持ち直し始めた」（ホクレン）との見方がある。今年産の牧草は今後、本格的に給餌される。

16年度は管内で114万トンの生乳を生産し、全道（379万トン）の約3割を占めた。回復基調が続けば、17年度は夏までの不振を補い、前年超えを達成できそうとの見方も出てきた。

もっとも、昨年9、10月は既に天候不順の影響が出始めており、直近2カ月間の増加だけで回復に転じたと言いきれない面がある。飼料用のトウモロコシは、今年も台風で倒伏したものが少なくない。「土が付着するなどして、発酵後の品質が低下しかねない」（管内JA幹部）との懸念が残る。